



なぎさは海のゆりかご

海のゆりかご通信 No.30 Mar.2012

～ 藻場・干潟・サンゴ礁・ヨシ帯・浅場… 「なぎさ」は人と海との共生の場 ～

「なぎさシリーズ」

今回の旅は、愛媛県西条市「壬生川（にゅうがわ）」。四国の霊峰「石鎚山（いしづちやま）」がそびえるこの地の里山と里海にドングリとアマモを植える人たちがいる。子どもの笑顔であふれる活動を引っ張る底びき漁師さんを訪ねました。

なぎさシリーズ No.24

ドングリとアマモ

足利由紀子

ドングリがきっかけで 始まった植樹活動

森は海の恋人と言われるようになって久しい。

2月の寒い土曜日、漁業者の植樹活動を見学するために愛媛県西条市の壬生川を訪問した。

下草が刈られ、きれいにならされた小高い丘に、クワやシャベルを持った子どもたちの声が響いている。西条市藻場づくり環境保全協議会が毎年実施している植樹活動に参加しているのは、地元の周布小学校と橘小学校の5年生32名。底引き漁師で市議会議員を務める会長の近藤達也さんのあいさつの後、子どもたちはクヌギやヤマザクラ、ヤマモモなど7種100本の苗を植樹、山の木の大切さを県の林業課の担当者から学習した後、海に見える展望台へと元気に走って行った。子どもたちの後ろ姿を背に、協議会と連携してい



る愛媛県林業研究グループ連絡協議会の有志の方が苗の手直しを手際よく行っている。苗は3年後あたりから大きくなり始め、10年後には見違えるほどになるという。お話を聞いている横で、昨年子どもたちが植樹したサザンカが赤い花を咲かせている。

近藤さんが植樹活動を始めたのは10年前。ご自身の子どもさんが学校でドングリを使うというので山に探しに行った際に、いつの間にか慣れ親しんだ山にスギやヒノキが増えていて、ドングリの木を探すのに苦労したのがきっかけとか。台風で荒れた森を見て、今自分たちが漁をしている海を大切にするには、山を大切にしないといけないと思ったそう。以降、林業家グループや行政、地元住民を巻

	都道府県:	愛媛県
	地域協議会:	愛媛県藻場づくり活動地域協議会
	活動組織名:	西条市藻場づくり環境保全協議会
	協定先:	愛媛県西条市
	構成員数:	14名
	対象資源:	藻場
活動内容:	計画づくり、モニタリング、アマモの移植・播種、流域における植林など	



き込みながら「漁民の森」づくりを続けてきた。環境・生態系保全対策事業は平成21年度から着手、アマモ場の造成を中心に、啓発活動の一環として、地元の小学校への出前授業や植樹活動を実施している。

感想を聞いた。「根っこがいっぱいあって穴を掘るのが大変だった」「いろんな先生が手伝ってくれて、よかった」「木が大きくなったら、また見に来たい」みんな笑顔である。先生にも「教科書を読むだけの勉強と違い、生きた学習として、山と川と海のつながりを学ぶことができます」と好評だった。そして、作業を終えた子どもたちを前にしての近藤さんの言葉が説教くさくなくていい。「大人になって、みんなの子どもがドングリを欲しいと言ったら、ここにおいて。その頃にはドングリができるくらい大きくなっているから。心の中の秘密の場所におくんだよ」。

子どもたちとの交流から 元気をもらう

子どもたちの作業風景を見学しているとき、



作業を手伝っている中に随分若い方がいるのが気になった。子どもたちも気安く話しかけている。参加者のお兄さんかな?と思いたずねると、漁師さんだという。どこも高齢化や後継者不足が叫ばれる中、若い漁師さんがいることにびっくりした。協議会のメンバーは底曳きを操業する18歳、20歳から73歳までの漁業者6名と市民が8名。魚を捕って売って生計立てているのだから、国民の利益になることをしないと、という近藤さんの考えに賛同した仲間が協議会組織を作ったそうである。小学校の出前授業もこのメンバーで行く。海と山のつながりや、漁業の話をしたり、ロープワークを教えたりする活動を通じ、素直な子どもたちと接すると、「自分たちも



漁師が教えるロープワーク

がんばろう」という気持ちになるのだそう。特に高齢な漁師さんは子どもとのふれあいを喜んでいるという。この活動が、本来の目標である市民や子どもたちへの啓発に加え、漁業者の意識改革にもつながっていると感じた。ちなみに、植樹を行っている丘に立てられた「漁民の森」の看板の文字もみんなで一文字ずつ書いたのだそう。言われてみると文字がちょっと不揃いで、それがかえってほほえましい。こんな所にも、少人数の組織のチームワークの良さが感じられる一面を見たような気がする。そして、何よりも、若い後継者がいるということが、この協議会の前向きな姿勢につながっているのだろう。



他地域の協力を得て、アマモの種（花枝）を採取

再生したアマモ場でコウイカが産卵

場所を市の支所に移して、近藤さんと西条市の担当の高橋さんにお話を聞く。沿岸の様々な開発が原因で消失したアマモ場の再生を、河原津海岸を中心に行っている。再生の方法は、広島県の因島漁協の協力を得て、毎年因島で花枝を採取、播種の方法は試行錯誤を繰り返して、種子と腐葉土をガーゼで包み投入する方法に落ち着いた。ガーゼは海中でばらけてなくなるのが早いという利点があるそうだ。これを使うと便利なんですと、塩ビパイプを使ったガーゼ包み方を説明する高橋さん。アマモのこと、魚のこと、海のことを熱く語られる。こうして再生されたアマモ場では、昨年はコウイカの卵も確認され、活動は着実に実を結びつつあるようだ。しかし、余所のアマモ場と比較して地盤が硬いため、地下茎の発達が悪く、折角繁茂したアマモが台風で流されてしまうなどの問題も残ってい



再生したアマモにコウイカの卵を発見！

るという。今年は天候不順のせいか、発芽も遅いらしい。この冬は海苔も全くだめだったと、ふたりの顔が曇る。「瀬戸内海は他国が入ってこない海、いわば生け簀のようなもの。だからこそ、資源管理型漁業を目指さないといけない。人間は考える力があるのだから」と近藤さん。リーダーを中心にチームワーク良く活動を実施できる協議会組織と、それを縁の下でしっかりとサポートする行政や市民など、活動する地域に信頼関係がきちんと築かれていることがうかがえる。

漁業が元気になると地域も元気に

本事業とは別であるが、協議会のメンバーを中心に、組合の有志で1年前から月一回の



朝市にも取り組んでいる。自分の捕った魚を愛情込めて販売することで、魚食の普及や地場の魚に付加価値を付けたいという思いから始めたそうであるが、家族も手伝ったり、新しい漁業者が増えたりと輪が広がりつつある。市民からも好評で、毎回売れ切れごめん、だそう。この朝市を続けるうち、家族の中で会話が増えてよかったという漁師もいるという。活動が様々な効果を生み出している。

「魚のこまいのは捕るな」と言い続けてきた近藤さん。持続的生産のためにはなんぼ残せばいいのかを研究したいと娘さんが水産の道に進んだそう。もちろん、お父さんと一緒にドングリを広い、木を植え、朝市を手伝ってきた子どものひとりだ。漁民の森の木が成長するように、この壬生川では、海に縁を

持つ子どもたちもスクスクと育っていることが、この協議会の活動が地域に根をおろしていることの証なのではないだろうか。

最後に気になっていたことをたずねてみた。「植樹した木のお世話はどうしているんですか?」。植えるだけで世話をしないと苦情が来る。いいかっこして、やりっ放し。と言われるのは辛いので、下草刈りを中心とした世話もきちんとやっているよ、との答えが返ってきた。もちろん頼もしい助っ人である林業家の方々とも仲良く仕事ができるよう、普段からコミュニケーションを図っているそうだ。よい評判があつという間に広がるのと同じに、悪い評判も広がるのは早い。ドングリができるまで見守らないと。と、海の活動の取材にうかがったのに、最初から最後までドングリの話で盛り上がった取材だったが、この熱意が周囲の人々に伝わるからこそ、活動の輪が着実に広がっているのだと感じた。



～ 著者プロフィール ～

足利由紀子

(あしかがゆきこ) 氏

NPO 法人水辺に遊ぶ会 理事長

里海里浜を目的に、地元の中津の干潟をフィールドに自然観察会や調査研究活動を展開。

また、海や干潟の保全に漁業者が必要不可欠と、交流を深め、現在、漁業者とともに漁業体験活動や保全活動など様々な取組を展開。



～ 編集後記 ～

「今日植えるドングリの木は、ブナの木なのではないでしょうか?」小学校の先生の質問を皮切りに、県林業課の職員先生の出前授業が始まった。

ブナは、標高 1000m 前後の山で育つ。今日、植樹を行う小さな山では育たない。これから、植樹を行うドングリの木はクヌギという木。みんなはナルト疾風伝というマンガを知ってる? 子どもたちの目がかがやく。その中にうちはサスケが出てくるのは知ってるよね。みんなが大きくなすく。そのサスケの能力である万華鏡写輪眼にはどんな術がある? 「アマテラス、エントン・カグチ、スサノオ」。子どもたちの口から、難しい言葉が次々にでてくる。

この万華鏡斜里眼の術の一つスサノオは、ヤワタノオロチという8つの頭を持った大蛇を倒したとされる神の名前。日本書紀の中で異説として「スサノオのひげを抜くとスギ、胸毛を抜くとヒノキ、眉毛を抜くとクスノキ、おしりの毛を抜くとマキとなる」そして「スギとクスノキは船を、ヒノキは宮(家)を、マキは棺をつくるのが良い。たくさんの木の種をまこう」と息子たちに呼びかけ、地上に木種をまいたという神話が紹介される。また、スサノオがヤワタノオロチを倒した後に、首を埋め、その上に8本のスギを植えたと伝えられる八本杉伝説。この伝説は「荒れ狂う川に木を植えれば静まる」という教えの一説らしい。

八本杉伝説を詳しく調べてみた。この伝説の舞台は、出雲地方。この地のタタラでは、古来から製鉄業が盛んで、大量の火を焚くため、周辺の山林が丸裸にされた。そのため、毎年のように川があふれ、土砂崩れが起き、田畑が被害を受けたり、人命がうばわれた。一説では、蛇行する出雲の川をヤワタノオロチに例え、それが町に襲ってこないように、山に木を植え、森を再生し、人や土地を守るといった「知恵・教訓」として語り継がれるようになったのではとある。

「土をいって、木をいって、こころで感じてください」と仰った近藤さん。「自分たちの目の前にある山や川、そして海を知って欲しい」と仰る近藤さんの想いは、小学生の心に確かに届いたのではないだろうか。(吉)

